

論文

# 韓国における学術出版の生産量分析研究

李 雲 山

## 目 次

- 1. 序論
  - 1) 研究目的
  - 2) 研究方法
- 2. 学術書の生産量分析
  - 1) 学術書の生産量分析の手順
  - 2) 学術書の生産量分析
    - a. 1975年
    - b. 1985年
    - c. 1995年
- 3. 学術書生産の時系列的変化
- 4. 日本の学術出版との比較
- 5. 学術書の出版者
- 6. 結論
- 7. 参考文献

### 1. 序 論

#### 1) 研究目的

高度の情報化が進んだ今日多様なマスメディアが開発されているにもかかわらず、依然出版は社会の文化的な行為の根本的なものとして、その重要性を知っていない。そうした出版中でも学術出版は学問探究のために重要な役割を果しており、国家の学問的・文化的な発展を支持するためには充分な量の学術出版が要求されると思われる。韓国の学術出版の研究のためには、量的分析が課題である。これまで、学術出版について論ずることは、既存の出版統計を利用しては難しかった。なぜならば、毎年出版される書籍統計は学術書の機能別ではなく、学問領域別分類として韓国の十進分類法に依拠して示されているためである。だから韓国の学術出版を理解するためには別の角度<sup>\*1</sup>からの

出版分析が必要であった。筆者は箕輪成男先生の学術出版研究のひそみにならい韓国における学術出版の量的分析を試みた。

「今まで学術出版に関して語られることは決して少なくなかったが、一部の領域を除いてそうした議論が比較的不毛に終わったのは、学術書を機能によって明確に分類し、それぞれを機能的に捉えることをせず、学術書一般という莫然たるレベルで考えてきたためであり、そして、そうした明確な分類にもとづく各種学術書の出版状況に対する量的把握を欠いたためである。学術出版というすぐれて社会的・経済的な営為を、社会的・経済的な営為として捉えるためには、なによりもその量的把握と分析が必要なのだが、出版における統計の不備と、多くの論者の文学的発想への傾斜から、とにかく議論は定性的かつ断片的なものに止り、印象批判の域を脱しなかったといえることができる\*2。」

以上の箕輪成男先生の議論に基づいて、韓国における出版統計の欠点を認識し、新たな分類基準\*3によって学術出版の量的分析を試みると、学術出版研究の新しい分野を開く里程表になると思われる。また、一定の時間を置いて学術出版に対する量的な把握ができれば、韓国における学術出版の時系列的分析もできるとと思われる。それだけでなく、ひいては未来の学術出版のために有効な戦略を立てることもできるであろうし、各国との比較を通じて韓国の特殊性を認識しやすいのである。

## 2) 研究方法

韓国における学術出版の量的分析のためには、次のような研究方法によった。

1. この論文の研究資料として扱う出版年鑑は、大韓出版文化協会によって1951年に創刊されたもので毎年1年間に出版された新刊書目を整理・編纂するものである。この図書目録の収録の対象は1年間に大韓出版文化協会を通じて韓国文化公報部に納本した初版が収録の対象になっている。納本制度に漏れる出版物もあるかもしれないが、本論文の目的のためには、その点は無理して差し替えないと思われる。

2. 出版年鑑の図書目録記載の各点の内容を識別判断し、まず学術書と非学術書に分け、次に学術書の5つの細目への分類をした。以上の手順によって1975, 1985, 1995の3年度について得られた統計を時系列的に比較すると共に、箕輪教授の日本の場合のデータで国際比較を行った。

## 2. 学術書の生産量分析

### 1) 学術書の生産量分析の手順

学術書を量的に分析研究するためには、学術書の定義が必要である。

箕輪教授は学術書を5種類に分けている。(1) 研究者が研究から得た新知見を研究者に向けて発信する1次文献(2) 大学レベルの教科書と教養書(3) データ・資料(4) 参考文献(5) 書誌(2次文献)である。これを本論文における分類の基準として受用する。

以上は、学術書の範囲であるが、これに対して、学術書以外には児童書と学習参考書、小説や娯楽のための非小説、個人的趣味のための本がある。

筆者は分類作業において学習参考書は大学水準以下\*<sup>4</sup>であるから学術書から除いた。運命学, 四柱学\*<sup>5</sup>, 姓名学\*<sup>6</sup>, 処世術, 巫俗\*<sup>7</sup>, 神化, 各宗教の伝播を目的にする書籍, 地図, 旅行, 指針書, ビジネス実務書, そして、一般常識と各種国家試験受験のための参考書など、受験を目的としたものは学術書から除いた。次に、科学常識, 医学常識, 料理本, 大学水準以下のコンピュータ教材, 名曲全集, 写真集, 外国語会話教材, 各種小説類, 詩集, 興味ののための歴史書なども学術書から除外した。

### 2) 学術書の生産量分析

1975年\*<sup>8</sup>, 1985年\*<sup>9</sup>, 1995年\*<sup>10</sup>各年度について〈表1-1〉〈表1-2〉〈表1-3〉が得られた。

(縦軸は、韓国十進分類法(Korean Decimal Classification)によって構成した。)

〈表1-1〉 韓国における学術専門書籍の出版点数(1975年)

	出版総 点 数	学術書 以 外	学術書 合 計	1次 文 献	教科書 教養書	データ ・資料	参考 文 献	2次 文 献
総 記	228	100	128	30	42	0	50	6
哲 学	337	109	228	4	219	1	4	0

宗 教	601	496	105	4	114	0	1	0
社会科学	1005	354	651	22	523	7	95	4
純粋科学	135	33	102	1	94	0	6	1
技術科学	779	361	418	3	361	10	41	3
芸 術	481	391	90	2	79	1	8	0
語 学	430	199	231	7	90	0	134	0
文 学	2481	2421	60	11	45	0	4	0
歴 史	211	95	116	5	106	1	4	0
児童書	1069	1069	0	0	0	0	0	0
学参書	1468	1468	0	0	0	0	0	0
計	9225	7082	2143	89	1673	20	347	14

〈表1-1〉を見ると、学術書の量は全体出版物の23.2%で非学術書の76.8%を比べると相対的に少なかった。学者が仲間の学者を対象として発表する論文、つまり狭義の学術書を意味する1次文献は89点で学術書全体の4.15%、全体の刊行点数については1%に過ぎない。1次文献とともに学術情報伝達において重要な役割を果しているデータ・資料を含めても学術書の5%、全体の刊行点数の1.2%に過ぎない。いいかえれば、部数は平均して2300部程度、定価は平均1300WON（今の170円）とすれば、3億3千万WON（4千4百万円）で1975年の書籍総刊行額の約276億WONの1.2%に過ぎないということである。

1次文献をその領域別に比較してみれば、総記（30点）＞社会科学（22点）＞文学（11点）＞語学（7点）順になっている。総記の1次文献では、大学論文集と学会誌、そして記念論文集が含まれている。社会科学では、法学、教育学、社会学、経済学関連の論文が多様に出版されている。文学領域では、11点の1次文献が出版されたが、まだ韓国文学の分野だけに限られているのが特徴である。

これに対して、技術科学の1次文献は1点に過ぎない、これは自然科学分野において新たな発見と理論を1冊の本として発表するのは難しいからである。

〈表1-2〉 韓国における学術専門書籍の出版点数(1985年)

	出版総 点 数	学術書 以 外	学術書 合 計	1次 文献	教科書 教養書	データ ・資料	参考 文献	2次 文献
総 記	457	248	209	34	146	0	28	1
哲 学	1009	762	247	5	240	0	2	0
宗 教	2619	2289	330	12	293	2	21	2
社会科学	4276	2381	1895	93	1409	49	341	3
純粋科学	581	377	204	4	195	3	2	0
技術科学	2702	2115	587	21	479	11	74	2
芸 術	2115	1957	158	5	137	3	12	1
語 学	1755	1554	201	20	127	0	54	0
文 学	7960	7747	213	41	167	0	4	1
歴 史	1290	1114	176	28	92	45	7	4
児童書	5495	5495	0	0	0	0	0	0
学参書	3484	3484	0	0	0	0	0	0
計	3743	29523	4220	263	3285	113	545	14

〈表1-2〉を見れば、全体の出版物に学術書が占める量は4220点(12.5%)で非学術書29523点(87.5%)に比して比重が微弱であることがわかる。これは非学術書として分類される児童書(5495点)、学習参考書(3485点)が出版総点数の26.6%を占め、また文学書の場合には、学術書213点を除いた7747点が一般小説と詩集などの非学術書のためである。

学術書をさらに分析すれば、1次文献が263点で学術書全体の6.2%、全体刊行点数については0.78%になっている。データ・資料の113点を1次文献に含めると376点で学術

書の8.9%を占めている。このグループの書籍は、部数は平均して3400部程度、定価は平均4600WON（600円）であったことを思うと、総数は約59億WON（約8億円）となり、1985年の書籍総刊行額約5277億WON（約700億円）の1.1%に過ぎないことがわかる。

次に1次文献の量を領域別に比較してみると、社会科学（93点）＞文学（41点）＞総記（34点）＞歴史（28点）＞純粋科学（21点）＞語学（20点）

順になった。社会科学領域では活発な論文集刊行が続いた、特に文学でも微弱であるが、外国文学研究の1次文献が登場した。また、歴史でも韓国史だけでなく世界史についての研究が活発になったことがみられた。

〈表1-3〉 韓国における学術専門書籍の出版点数（1995年）

	出版総 点 数	学術書 以 外	学術書 合 計	1 次 文 献	教科書 教養書	データ ・資料	参考 文献	2 次 文献
総 記	350	283	67	9	50	0	3	5
哲 学	717	451	266	1	265	0	0	0
宗 教	1834	1744	90	7	78	0	4	1
社会科学	3502	2051	1451	148	1021	17	258	7
純粋科学	521	306	215	4	196	0	15	0
技術科学	3155	2156	999	26	895	11	67	0
芸 術	1107	989	118	2	109	0	7	0
語 学	1624	1474	150	14	93	0	43	0
文 学	4771	4571	200	38	160	0	1	1
歴 史	972	782	190	42	130	1	2	15
児童書	4163	4163	0	0	0	0	0	0

学参書	4691	4691	0	0	0	0	0	0
計	7407	23661	3746	291	2997	29	400	29

〈表1-3〉を見ると、学術書の占めている量は、3746点で全体出版点数の13.7%、これに対して、非学術書は86.3%になっている。1次文献は291種が刊行されて学術書の7.8%、全体点数については1.06%に過ぎない。

データ・資料29種を含めても320種に止り、学術書の1.2%である。そして、このグループの刊行部数は平均5300部程度と思われ、定価を平均9500WON（約1300円）とすれば、刊行総数は170億WON（約23億円）になる。これは1995年の書籍総刊行額約1兆4千億WON（約1870億円）の1.8%に過ぎない。

1次文献の量を各領域別に調べると、社会科学（148点）＞歴史（42点）＞文学（38点）＞純粋科学（26点）の順になる。特徴としては、社会科学領域で各種研究院を中心とした社会問題、行政学、法学分野の1次文献が多く登場した点である。歴史分野でも大学出版部だけでなく歴史学会の活発な活動の影響で韓国史研究が多様化に向けて進んでいることが分かった。

### 3. 学術書生産の時系列的変化

以上では、1975年、1985年、1995年の学術出版を量的に分析し、そして、学術書の狭義的な定義としての1次文献を中心として各年度別に特徴を調べた。

これから、以上の分析結果に基づいて、学術出版を時系列的に分析し、その変化を明らかにしようと思う。この分析ができてはじめて学術書出版の未来を予測したり、適正な対策を計画することができると思う。

〈表2〉 韓国の学術書籍生産の時系列的変化

	1975年		1985年		1995年	
1次文献	89	0.96% (4.1%)	263	0.78% (6.2%)	291	1.06% (7.7%)

教科書 教養書	1673	18.1% (78.1%)	3285	9.7% (77.9%)	2997	10.9% (80%)
データ 資料	20	0.22% (0.9%)	113	0.33% (2.7%)	29	0.1% (0.8%)
参 考 文 献	347	3.76% (16.2%)	545	1.6% (12.9%)	400	1.5% (10.7%)
2 次 文 献	14	0.15% (0.7%)	14	0.04% (0.3%)	29	0.1% (0.8%)
学術書 総 計	2143	23.2%	4220	12.5%	3746	13.7%
学術書 以 外	7082	76.8%	29523	87.5%	23661	86.3%
出版総 点 数	9225	100.0%	33743	100.0%	27407	100.0%

( ) 中の場合は学術書内の比率である。

学術書の中で、大学水準の教科書と教養書といわれる解説的な本が圧倒的に多くある事実が判明した。これは各年度の共通的な特徴で学術書全体の80%を占有している。この理由は、低いマージンの影響で財政的に苦勞している学術出版においてもこれらの本は例外的に商業的な出版が可能であり、大学などの教材として流通路が安定しているためである。

これに対して、1次文献は相対的に微弱な感があるが、1995年を1975年と比較すれば種数で3倍以上の出版成長率を見せている。また、学術書中の占有率が1975年4.1%, 1985年6.2%, 1995年7.7%で継続的に成長している。次に、データ・資料は1985年に113種で大きく成長ぶりをみせたが、1995年には減少した。この理由は、1985年に社会科学領域で税務および広告資料が発刊され歴史領域で朝鮮王朝実録が発刊されたことがその原因である。

参考文献の場合、統計数値上ではあまり大きな変化がないが、学術書内の比率を見る

と次第に減少している。これは参考文献の大部分を占めている辞典類の新刊発行が少なくなったためである。

2次文献は、学術書の中でもっとも少ない比率を示しているが、1995年には歴史領域だけで実録インデックスと文献備考が15種くらい発行された。1次文献の論文集であるものの刊行種数が微弱な状況下で論文抄録やインデックス集が大きく成長するのを望むのは無理だろう。

時代的背景における学術書の領域別変化を述べてみる。統計数値上には現れていないが、学術書の内容面で見ると大きな動きがあったことがわかる。

1975年に比して1985年は社会科学領域で大きな成長をみせ、学術書の全般にわたって3倍程度の成長率を見せた。1980年代の混迷する政治状況と出版社登録抑制、出版物取り締まり強化などのいろんな厳しい状況下でも社会科学系統の学術書がますます増えたのは、韓国の学術出版の発展を象徴する事実であると思う。また社会科学領域中では、法例集、法典、法解説書、法規集などが多く発行された。1995年は1990年代初期の出版成長以後類例のない出版の沈滞期であって、出版点数と学術書の生産において低落をみせている。

1995年は点数面で全般的に減少したのに、科学化、技術化の時代状況の勢いによってコンピュータ関連学術書だけが多量出版された。

なお、学術書以外を見ると、児童書と学習参考書が総点数で大きな領域を示していることがわかる。時系列的に調べると、1975年約18%、1985年約27%、1995年約32%となり、総点数での占有率が継続的に高くなる事実が現れた。それでは、学術書の比重が少ないのはこれら児童書と学習参考書の比率が極端に高いためである。

#### 4. 日本の学術出版との比較

韓国の学術書生産量分析を通じて得られた結果を日本の場合と比較した。本来日韓の学術生産量について正確に比較研究しようとすれば、日本の場合にも1975年、1985年、1995年の学術書の統計資料が必要である。しかし、日本については1979年、1988年の統計資料しかないので、日韓学術出版の目立つところを中心に比較した。

〈表3-1〉日本における学術専門書籍の出版点数（1979年）  
 （箕輪成男先生「情報としての出版131ページ」）

	出版総 点 数	学術書 以 外	学術書 合 計	1 次 文 献	教科書 教養書	デー タ ・資料	参考 文献	2次 文献
総 記	536	168	368	3	172	91	75	27
哲 学	1341	574	767	138	452	164	12	1
歴 史	1880	1032	848	101	589	107	43	8
社会科学	5940	1675	4265	388	3332	277	249	19
自然科学	2179	138	2059	42	1897	52	65	3
工 学	2371	762	1609	45	1414	8	134	8
産 業	1137	494	643	140	321	69	111	2
芸 術	2951	1951	1000	55	885	15	43	2
語 学	509	65	444	58	266	9	105	6
文 学	5456	4497	959	217	675	43	9	15
児童書	2215	2215	0	0	0	0	0	0
学参書	402	402	0	0	0	0	0	0
計	26935	13973	12962	1187	10003	835	846	91

日本の全体出版物に学術書が占めている量をみれば、学術書（12962種）と非学術書（13973種）が約2分の1ずつという結果になっている。いいかえれば、点数で見て出版されている書籍の半分が学術書になるということである。韓国の学術書の比率に比較すれば、約2倍程度の占有率を出しているといえる。

次に学術書の内的分類にもとづく比較を試みた。

日本の場合には、狭義の学術書を意味する1次文献は1187種で学術書全体の9.1%を占有し、全体の刊行点数については4.4%を示している。これは、韓国の場合（1985年の

例をあげると学術書内では6.2%, 全体では0.8%) より高い比率をみせている。また、1979年日本の書籍総刊行額(約1兆円)で1次文献とデータ・資料を合わせた比率は約1.4%<sup>\*)</sup>になっている。これは韓国の約1.2%に比較すればほとんど同じである。そして、教科書・教養書の場合には、学術書の約80%で両国が比率においては一致している。日本の場合にも、やはり学術書中に大学水準の解説書が圧倒的に多いことがわかった。

次に参考文献と2次文献は、数値の上では両国の差があるが、学術書の中の比重が低いことは両国共通的な現状であると思われる。このような学術出版の様相は両国で似ていると思われる。

なお別の特異な点は、日本の非学術書に含めている児童書と学習参考書の比率(9.3)が韓国(1985年の例をあげると27%)に比して著しく低いことである。特に韓国における学習参考書の驚異的な発行数値は韓国の高い教育熱を反映していると思われる。

〈表3-2〉学術書の比重(箕輪成男先生「情報としての出版131ページ」)

	1979年	1988年
学 術 書	12.962 (48.1%)	13.021 (34.8%)
学 術 書 以 外	13.973 (51.9%)	24.420 (65.2%)
全体出版点数	26.935 (100.0%)	37.441 (100.0%)
1 次 文 献	1.187 (4.4%)	518 (1.4%)

〈表3-2〉は日本の学術出版における学術書の比重を簡略に比較したものである。これによると1988年の学術書の発行点数は、約1万3千点で統計数値では成長をみせた。しかし、1979年に約2分の1であった学術書量は約10年後1988年には約3分の1に減少したことがわかる。特に1次文献の場合には1187点から518点に減っている。これは研究者を対象にした純粋な学術書の出版がもっとも厳しくなっていることの現れと箕輪成男先生は言っている。

これに対して、韓国における学術出版の状況はどうであるのか。

上記で提示した〈表2-1〉をみると、韓国の場合には学術書の発行点数は1975年の2143点から1985年の4220点に約2倍の成長を見せた。

また、1次文献の場合には1975年の89点から1985年の263点になって約3倍の成長をみせている。ただし出版総点数に対する比率では学術書点数は23.2%から12.5%に減少したことが確認できた。

しかし、韓国の場合には学術書出版の難しさもあるが、学術書点数比率の低落は児童書と学習参考書の比率が相対的に増えたためであると思われる。たとえば、1975年の児童書と学習参考書が2537種（18%）であり、10年後の1985年には8979種（27%）に増えたのである。

### 5. 学術書の出版者

以上で韓国学術書籍の生産について量的分析を試みた。次の疑問はここで把握された狭義の学術書1次文献の出版を誰が担当しているのかという問題である。

1次文献は1975年に89点、1985年に263点、1995年に291点と計算されている。これらがどの出版社によって出版されたかを調査した結果が次の〈表4-1〉である。

〈表4-1〉 学術書（1次文献）の出版社

1975年				1985年				1995年			
刊行 点数	出版 社数	合計 点数	出版 社名	刊行 点数	出版 社数	合計 点数	出版 社名	刊行 点数	出版 社数	合計 点数	出版 社名
1	36	36	省略	1	53	53	省略	1	72	72	省略
2	6	12	高麗	2	18	36	省略	2	20	40	省略
			大外				成均				
3	3	9	慶北	3	14	42	館大	3	11	33	省略
			大外				外				ソウル
5	1	5	一志 社	4	6	24	梨大 外	5	3	15	大外 労働研

6	2	12	一潮閣外	5	2	10	東国大外	6	2	12	究院外 開発研
7	1	7	嶺南大	6	1	6	高麗大	8	1	8	究院
8	1	8	啓明大	7	4	28	延世大外	10	2	20	集文堂 国民堂
				8	2	16	一潮閣外	12	1	12	一潮閣 地方行
				9	1	9	国民大	14	1	14	政研究 法制研
				12	2	24	ソウル大 外壇国	19	1	19	究院 海運産
				15	1	15	大	20	1	20	業研究 刑事政
								26	1	26	策研究
合計	50	89		合計	104	263		合計	116	291	

1975年の場合は、1次文献総数89点中に36社が1点しか出版していない。2点まで出版した出版社を合わせると総点数の過半数を越える。同じ状況は10年後の1985年にも現れ、1次文献の点数と出版社の数は増えたが、比率で見れば3点以下の出版社がやはり過半数を点有していることが事実である。1995年にも3点以下の出版社が総出版点数の過半数を占めている。

これは韓国における1次文献の出版が上記のように多数の出版社の分担によって支えられていることを示している。今日の出版産業においての学術出版は一般書籍と雑誌に比較して商業的な妙味に薄く、非採算的であるという問題を持っている。したがって、

出版社が学術書の刊行を固執するには資金力が弱いのではないかという推測が可能である。それでは、1次文献を多数出版している出版社はどんなところであるのか。

ここで発見したことは、1975年と1985年、1995年の学術出版を担当している主体が変化している事実である。1975年の場合には、一般出版社としては一志社と一潮閣が、大学出版社としては啓明大と嶺南大が学術出版の核心という一次文献を多数出版した。ところが1985年には出版社の学術出版に対する参与が急激に増えて、とくに大学出版社の強さがいちじるしく現れた。これは言論と出版についての干渉と制裁が厳しかった時代状況の中で一般出版社より大学出版社に原稿が殺到したと思われる。10年間に壇国大とソウル大などの活動によって主導権が確かに変わった。叡智閣が新たな学術出版社として登場したが、一潮閣だけがうまずたゆまず命脈を保っている。

1995年になるとふたたび新たな様相を呈した。これは大学出版社の低調と研究院の浮上である。大学出版社の参与が1985年の20社から15社に減少しただけでなく、ソウル大の5点を除くと全部4点以下しか出版されていない。1次文献を出版した一般出版社は89社で少量出版だけが可能であった。

これに対して、各種国家研究院が登場して多数の1次文献（79点－27％）を刊行した。こうした結果は政府の公的支援によって研究環境が用意された研究所で学術出版が活性化されたためと思われる。また優秀な人材を研究所に採用した政策も、その原因であると思われる。

また、別の観察として学術出版を主導している出版社を再びふたつのグループに分けることができる。1) 総合学術出版社で各学問の領域にわたってひとしく出版している出版社と、2) 専門的な学術出版社で単一の領域だけに集中して出版しているところである。

これを現すのが次の〈表4－2〉である。

〈表4－2〉 各領域の学術出版社

領域	1975年	1985年	1995年
総記	嶺南大（7） 啓明大（3）	壇国大（5） 延世大（5）	外国語大（2）

	延世大 (3)		
哲学	延世大 (1)	東国大 (4)	大韓基督教書会
	一志社 (1)		(2)
	汎友社 (1)		
宗教	東国大 (1)	長神大 (2)	
社会	韓国行動科学	叡智閣 (12)	
		韓国刑事政策研究院	
科学	研究所 (3)	ソウル大 (6)	(26)
	進明出版社 (2)	大韓商工会議所 (6)	海運産業研究院
	社会事業大 (2)	韓国開発研究院 (5)	(20)
		世宗大 (5)	韓国法制研究院
		高麗大 (4)	(19)
		壇国大 (4)	韓国地方行政研究院
			(14)
純粋	啓明大 (2)		ハンリム苑 (2)
科学			
技術		ソウル大 (2)	科学社 (2)
科学		世宗大 (2)	
		国民大 (2)	

語学		集文堂 (2)	
		国民大 (2)	
芸術	啓明大 (2)	梨花大 (3)	
		ソウル大 (2)	
		高麗大 (2)	
文学	一志社 (4)	一潮閣 (8)	一潮閣 (11)
	一潮閣 (3)	三志苑 (6)	集文堂 (5)
歴史		壇国大 (5)	景仁文化社 (4)

この表を通じて調べてみると、1975年において複数領域にわたって参与したところは啓明大出版部（6領域）、次に一志社（3領域）の順になっている。

1985年にはソウル大出版部が代表的な総合学術出版の役割を果し、この外は、壇国大、国民大、高麗大などが総合学術出版に積極的に参加していることがわかった。これに対して一潮閣などは文学というひとつの領域だけに集中して出版しているが見える。

1995年には総合学術出版の主導者であった大学出版社が弱くなり、これに代わって国家研究院が社会科学一分野に限って集中的に1次文献を生産している。

## 6. 結論

以上の観察から筆者は、三つの結論を引き出してみた。

1) 〈表2〉の分析をみると1次文献は10年おきの3年度ともに総出版点数の約1%であり、全出版物中極めて小部分であることがわかった。

2) 韓日の比較では1次文献においては、日本が総出版点数の4.4%、韓国が約1%であった日本に比較しても韓国の低いことがわかる。大学水準以上の教科書や教養書の場合学術書全体の約80%を占めていることが日韓で一致している。

3) 韓国における1次文献の出版は大部分を大学出版社と一般出版社が担当している。1995年に学術出版の担当者として浮かび上がった政府支援研究所の場合には、社会科学領域という政府の政策に関係する分野に集中していることがわかった。以上この論文は、

韓国学術出版研究に若干の理論的な根拠を与えるものと思われる。筆者は、今後この論文にひきつづき韓国における学術雑誌, 大学出版, 翻訳出版, 出版の流通などを逐次定量的な手法で研究を展開する予定である。

#### 脚注

- \*1 この角度とは、箕輪成男先生が主張した日本学術出版の機能別分類である。
- \*2 箕輪成男, 情報としての出版(東京: 弓立社, 1982年), 149頁
- \*3 この新しい基準とは、角柱1)の日本学術出版の機能別分類である。
- \*4 箕輪成男, 情報としての出版(東京: 弓立社, 1982年), 130頁
- \*5 四柱学とは、生まれた年・月・日・時の干支(結婚や運勢を占う資料になる)
- \*6 姓名学とは、陰陽説に基づいて姓名判断に関して研究する学問
- \*7 巫俗とは、巫女の風俗である。
- \*8 1976 韓国出版年鑑(ソウル: 大韓出版文化協会, 1976年)
- \*9 1986 韓国出版年鑑(ソウル: 大韓出版文化協会, 1986年)
- \*10 1996 韓国出版年鑑(ソウル: 大韓出版文化協会, 1996年)
- \*11 箕輪成男, 情報としての出版(東京: 弓立社, 1982年), 132頁

#### 参考文献

- 箕輪成男, 情報としての出版(東京: 弓立社, 1982年)
- 箕輪成男, 歴史としての出版(東京: 弓立社, 1983年)
- 1976 韓国出版年鑑(ソウル: 大韓出版文化協会, 1976年)
- 1986 韓国出版年鑑(ソウル: 大韓出版文化協会, 1986年)
- 1996 韓国出版年鑑(ソウル: 大韓出版文化協会, 1996年)
- 朴俊植, 参考調査論(大丘: 啓明大学校出版部, 1994年)
- 金明玉, 資料分類法(ソウル: クミ貿易出版部, 1986年)
- 世界哲学大辞典(ソウル: 成均書館, 1980年)

(1997, 3, 12 受理)